

攻撃行動の形成と親の養育行動との関係の検討

—社会的情報処理を媒介として—

(中間報告)

筑波大学大学院人間総合科学研究科 桑原千明

An investigation on the association between parenting behavior and the development of aggressive behavior.

—dose the social information processing mechanism mediate the association? —

Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba. Chiaki Kuwabara

問題と目的

攻撃行動は、その行動形態の観点から関係性攻撃 (relational aggression) と顕在的攻撃 (overt aggression) の2つに分類する立場が存在する (Crick & Grotpeter, 1995)。関係性攻撃は「友人関係や他の関係にダメージを与えたり、支配したりすることにより害を与える攻撃行動」と定義され (Crick & Grotpeter, 1995)、“仲間はずれ”、“無視”、“陰口”という3要素を含んでいる。この攻撃形態は幼児期から存在することが報告されており、児童期以降も持続するとされている (Crick, Casas, & Mosher, 1997; 磯部・佐藤, 2003)。一方の顕在的攻撃は、たたく、けるなどの身体的攻撃と悪口を言うなどの言語的攻撃を包括した攻撃行動である (Crick & Grotpeter, 1995)。攻撃行動は、その対象となる子どもに適応問題をもたらすだけでなく (畠山・磯部・越中・蔡, 2002; 畠山・山崎, 2006)、攻撃行動を行う子どもにおいても現在および将来の適応問題と関連することが先行研究の知見から示されている (Crick, 1996; Crick et al., 1997; Crick, Ostrov, & Werner, 2006; 磯部, 2002; Poulin & Boivin, 2000 など)。

上述のように攻適応上の問題をもたらす攻撃行動の過度な発達を予防するための示唆を得るには、攻撃行動の発達過程を解明することが有効であると考えられる。攻撃行動の発達を扱った研究の中には、親の養育行動に注目し、子どもの攻撃行動に与える影響を検討するものが多く見受けられる (磯部, 2006; Nelson & Crick, 2002; 三鈷・濱口, 2008 など)。さらに、親の養育態度が社会的情報処理という認知プロセスに影響を与え、攻撃行動の発達に影響を与えるという知見も提出されている。例えば Dodge, Pettit, Bates, & Valente (1995) は、養育行動として虐待ともいえる厳しい身体的攻撃をとまなうしつけに焦点をあて、5年間の縦断研究から養育行動が子どもの情報処理を媒介として子どもの攻撃的行動に影響を与えることを示した。同様の知見は、Weiss, Dodge, Bates, & Pettit (1992) でも報告されている。ここで、養育行動と攻撃行動を媒介するとされる社会的情報処理モデル

とは、攻撃的行動の規定因のひとつとして考案されたモデルである(Crick & Dodge, 1994; Dodge, Pettit, McClaskey, & Brown, 1986; 濱口, 2002)。社会的情報処理モデルとは、①手がかりの符号化, ②手がかりの解釈, ③目標の明確化, ④反応検索, ⑤反応決定, ⑥反応実行の6ステップからなる状況特殊性のあるオンラインの情報処理であり(Dodge et al., 1986), その測定は仮想状況を用いた場面想定法で行われる。このモデルにおいては、攻撃行動のように有能でない社会的行動は情報処理における偏りにより生じるとされている(Crick, 1995; Crick, Grotpeter, & Bigbee, 2002; Crick & Werner, 1998; Dodge & Coie, 1987; Dodge et al., 1986; 濱口, 2004など)。

先行研究では、攻撃行動の発達を説明するモデルとして社会的情報処理の媒介モデルが示されている(Dodge et al., 1995; Weiss et al., 1992)。しかしながらこのモデルは、顕在的攻撃で確認されているのみであり、関係性攻撃での検討は未だなされていない。さらに、養育行動として対象とされていたのは虐待的な養育行動のみであることから、現在までの知見からの媒介モデルの一般化は難しいと考えられる。また本邦においては、このモデルを検討した研究はなく、それどころか関係性攻撃と社会的情報処理の関連を検討した研究もほとんどない(島山, 2003)。したがって、本研究においては、子どもの攻撃行動の発達に関する示唆をえるために、関係性攻撃・顕在的攻撃を対象として、養育行動が子どもの社会的情報処理を媒介として攻撃行動に影響を与えるという媒介モデルの検討を行うこととした(研究2)。関係性攻撃を対象とすること、および社会的情報処理の場面特殊性や関係性攻撃児が関係性葛藤状況において社会的情報処理の偏りを示すという知見から(Crick et al., 2002), 関係性攻撃を対象とする研究においては仮想の対人葛藤状況として関係性葛藤状況を求められると考える。しかし関係性攻撃を対象とした社会的情報処理の研究が本邦ではほとんど存在しないため、その社会的情報処理を測定するために必要となる測定ツールが未整備なことから、媒介モデルの検討に先立って測定のためのツールの選定を行うこととした(研究1)。

現在まで、幼児の社会的情報処理の測定に用いる葛藤状況および応答的行動の選定を行うため、幼児の集団生活を最も目にする機会が多いと考えられる保育者を対象とした質問調査を研究1として行った。本中間報告では研究1の一部を報告する。

目 的

本調査の目的は2つである。まず第1の目的として、幼児の社会的情報処理の各ステップを測定する際に用いる、友人との対人葛藤状況(関係性葛藤状況/身体的・物理的葛藤状況)および各葛藤状況で幼児がとると思われる応答的行動の現状を把握することとした。応答的行動については、その現状を把握する際に、幼児のとるその応答的行動がどのような行動形態として捉えられる行動かもあわせて明らかにすることとした。さらに第2の目的として、得られた結果をもとに社会的情報処理の各変数を測定する際に用いる葛藤状況ならびに応答的行動の選定を行うこととした。

方 法

1. 調査対象者 関東圏の私立、公立幼稚園、保育所 13 施設に所属する保育者 34 名

2. 調査時期 2008 年 6 月から 8 月

3. 手続き 調査は、個別記入式の質問紙調査により実施した。

4. 質問紙の構成

①調査対象者について尋ねる部分：調査対象者の年齢、性別、職務年数について尋ねた。

②幼児が日常生活で経験する葛藤状況について尋ねる部分：この部分は、提示された 4 葛藤状況エピソードごとに(1)その葛藤状況を日常生活において保育者が目にする頻度を尋ねる項目と、(2)各葛藤状況において実際に幼児がとる応答的行動を尋ねる項目とで構成されていた。提示された 4 つの葛藤状況エピソードは、Crick(1995)を参考に著者と大学教員 1 名の協議の上で選定されたもので、幼児において想定される関係性葛藤状況エピソードと身体的・物理的葛藤状況エピソード、各 2 エピソードからなっていた(Table1)。各エピソードの主人公(以下“葛藤児”とする)について、幼稚園・保育所の年長児を想定するようリード文で示した。(1)葛藤状況の日常生活における頻度を尋ねる項目は、“このお話のような出来事は、日ごろ幼稚園・保育所でどのくらいの頻度で起こりますか”という教示文が示され、“ほぼ毎日見かける”、“しばしば見かける”、“時々見かける”、“ほとんど見かけない”、“これまでに一度も見ることがない”の 5 段階評定による回答を求めた。(2)各葛藤状況において実際に幼児がとる応答的行動を尋ねる項目では、各状況で幼児がとる行動を、望ましい行動と望ましくない行動とに 2 分して自由記述形式で回答を求めた。回答に際して、幼稚園・保育所で実際に見られる行動を回答すること、いくつか思いついた場合は複数回答をすることを併せて求めた。

表1 研究1で想定された4葛藤状況エピソード

関係性葛藤状況エピソード	
RC-1	クラスのみみんなで外で遊ぶ時間、同じクラスのお友だち何人かが鬼ごっこをしていました。その日、(葛藤児)ちゃんは鬼ごっこをとてやりたかったのに、鬼ごっこをしていた1人のお友だちに『いれて』と言いました。するとその友だちは『(葛藤児)ちゃんはあとで』と言いました。
RC-2	C(葛藤児)ちゃんが朝幼稚園に行くと、下駄箱のところに同じクラスのDちゃんとEちゃんがいました。C(葛藤児)ちゃんが『おはよう』と言うと、2人は何も言わず、ひそひそと小さな声でおしゃべりをしながらお部屋に行っていました。
RC-2-R	(葛藤児)ちゃんが廊下を歩いていると、同じクラスの2人のお友だちがいました。(葛藤児)ちゃんが『やあ！』と言うと、2人は何も言わず、ひそひそと小さな声でおしゃべりをしながらお部屋に行っていました。
身体的・物理的葛藤状況エピソード	
OC-1	(葛藤児)ちゃんは机の上で積木で高い建物を作っていました。すると、その近くを通ったお友だちが机にぶつかりました。積木の建物は倒れて、壊れてしまいました。
OC-2	(葛藤児)ちゃんはお気に入りの靴をはいて幼稚園へ行きました。お外遊びの時間に突然お友だちが後ろからぶつかってきて、(葛藤児)ちゃんは水溜りに入ってしまった、靴が泥だらけになってしまいました。

結果と考察

本調査では、まず各葛藤状況エピソードの頻度を算出し、続いて各葛藤状況における応答的行動について KJ 法(川喜田, 1967)を援用した手続きを用いて分類した。それらの結果から、幼児の社会的情報処理の各ステップを測定する際に必要となる葛藤状況エピソードと各状況における応答的行動について検討し、エピソードおよび応答的行動の選定を行った。なお各葛藤状況エピソードは、表1に示した通り、本調査で提示した2つの関係性葛藤状況エピソードを RC1, RC2, 2つの身体的・物理的葛藤状況エピソードを OC1, OC2 として以下に記述する。

1. 各葛藤状況エピソードの頻度についての検討

各エピソードに示された葛藤状況を保育者が目にする頻度を検討するため、5段階評定の各段階への回答の全回答に対する割合を算出した(以下、回答率とする)。各エピソードに示された葛藤状況を保育者が目にする頻度についての回答率は図1の通りであった。RC1, OC1, OC2 は、保育者がその状況を幼児の日常生活において一定以上の頻度で目にしてしまうと考えられる“ほぼ毎日見かける”, “しばしば見かける”, “時々見かける”への回答率が 82%, 94%, 88%と 80%を超えていた。また, “これまでに一度も見ることがない”への回答率は RC1, OC1, OC2 の3エピソードでは、0%であった。一方で, RC2 についての“ほぼ毎日見かける”, “しばしば見かける”, “時々見かける”への回答率は 12%であり, 反対に“ほとんど見かけない”, “これまでに一度も見ることがない”への回答率が 88%であった。

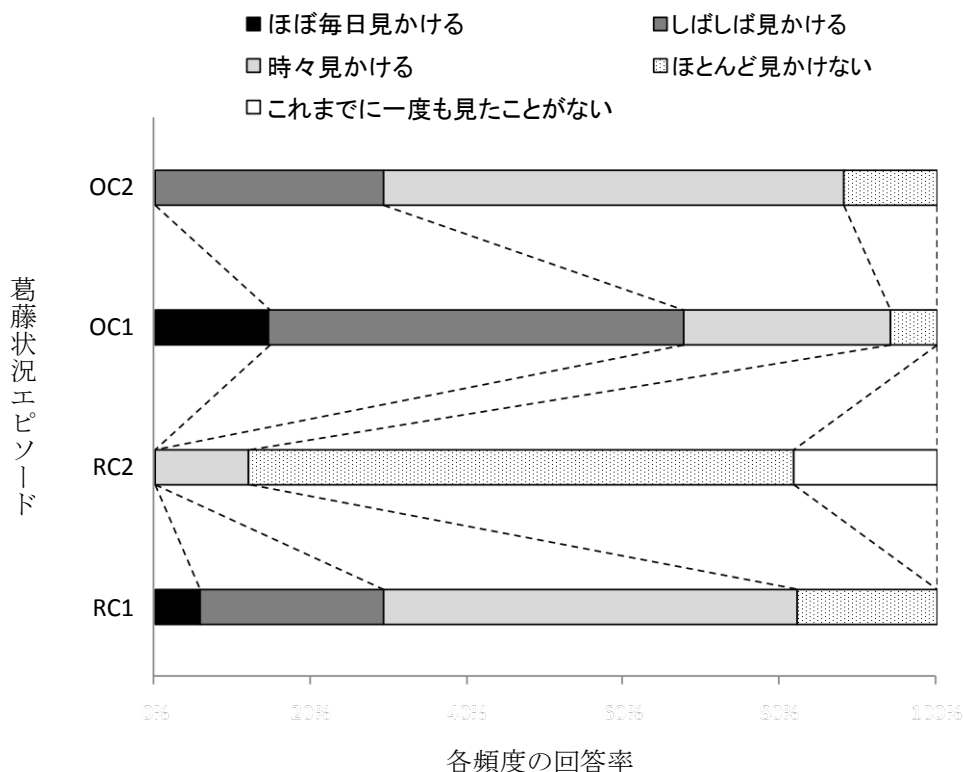


図1 各葛藤状況を保育者が目にする頻度の回答率

以上の結果から、OC1、OC2、RC1は、保育者が日常生活である程度目にする妥当な葛藤状況であると考えられる。しかしながら、RC2は、保育者が目にする頻度が少ない、もしくは一度も目にしたことのない葛藤状況であり、幼児において妥当な葛藤状況ということはできないと考えられた。この結果は、関係性攻撃の行動が保育者など目の届きにくいところで生じる(磯部, 2001)こととも関連していると考えられるが、RC1が一定以上の頻度で目撃されていることを考慮すると、関係性攻撃が保育者に見えにくい攻撃行動であることによるのみ得られた結果とは言い難い。したがって、社会的情報処理の測定に用いる妥当な葛藤状況とするために、状況エピソードを改変することとした。この改変案の作成は次の3点を考慮し、著者と心理学系大学院の教員の2名で協議の上で行った。改変に際して考慮した点は、①本調査の自由記述で示された保育場面の現状、②他の3状況と同様にあいまいな葛藤状況である必要性、③関係性攻撃の“仲間はずれ”という要素をRC1が含んでいることから、その他の“無視”、“陰口”という要素を含める必要性の3点であった。この協議の結果得られた改変案を心理学を専攻し、関係性攻撃の知識を有する大学院生2名に提示し、その状況が「関係性攻撃状況と捉えられるか否か」を尋ね、「捉えられる」という回答で一致したためRC2の改変案RC2-Rを含めた4状況を社会的情報処理測定のための葛藤状況として決定した(表1)。

2. 各葛藤状況エピソードにおける幼児の応答的行動の検討

続いて、各葛藤状況において幼児がとる応答的行動の実態の把握、および各行動がどのような行動としてとらえられるかを検討するため、研究1の回答に含まれる応答的行動についての記述内容を整

理し、構造化するための分析手法として、KJ法の手続きを(川喜多, 1967)を援用して分析を行った。結果の一部として、RC1における望ましい行動、望ましくない行動についての小・大カテゴリの度数集計、出現率および記述例を表2-1、2に示す。

表2-1 関係性葛藤状況(RC1)における望ましくない行動の度数・出現率・記述例

大カテゴリ	小カテゴリ	記述例	度数	出現率(%)
RC1における望ましい反応行動				
	「いれて」と言う		17	31.5
	1 すぐにAちゃんに「入れて」と言う	入れて欲しいことをもう一度伝える	9	16.7
	2 少し待って「入れて」と言う	少し時間がたってから『また入れて』と言ってくる	2	3.7
	3 鬼ごっこをしている他の子に「入れて」と言う	他の鬼ごっこをしている友だちにも入れて欲しいとお願いしてみる	6	11.1
	違う友だちと遊ぶ		7	13.0
	7 違う友達と鬼ごっこする	違う友達と鬼ごっこをする	2	3.7
	8 違う友達と遊ぶ	そのまま違う子のグループにいく	5	9.3
	その他		30	55.6
	4 入れてくれるまで待つ	『じゃ、次は私ね』と違う遊びをして待つことができる	3	5.6
	5 Aちゃんに理由を聞く	なぜあとでなのか理由を聞く	9	16.7
	6 保育士に言う	保育士に話をしにくる	13	24.1
	9 分類不能		5	9.3
合計			54	100.0

表 2-2 関係性葛藤状況(RC1)における望ましくない行動の度数・出現率・記述例

大カテゴリ	小カテゴリ	記述例	度数	出現率(%)
RC1における望ましくない行動				
	怒る		4	9.1
	2 怒る	Aちゃんに対して怒ってしまい、いやな顔でその場を立ち去ったりする	1	2.3
	3 睨む	変な目つきをする	1	2.3
	4 怒って立ち去る		2	4.5
	関係性攻撃		2	4.5
	7 誘い込む	遊びの中に入れて一緒に遊んでいる子を自分の方に誘いこむ	1	2.3
	8 悪口	Aちゃんのことを悪く言う	1	2.3
	その他		38	86.4
	1 手を出す・身体的攻撃	手をだす	14	31.8
	5 言いつけると脅す	『どうして入れてくれない』『先生に言っちゃうから』と相手を脅す	5	11.4
	6 言いつける	『いじわる先生にいつちゅうから』と保育士に伝えてくる	4	9.1
	9 泣く	泣く	5	11.4
	10 諦める	あきらめて他の遊びを行う	2	4.5
	11 何もせずに見ている	何もせずに見ている	1	2.3
	12 ふてくされる	1人でふてくされている	2	4.5
	13 勝手に入る	『Bちゃんはあとで』と言われたが無視をして勝手に「おにごっこ」の仲間に入ってしまう	1	2.3
	14 分類不能		4	9.1
合計			44	100.0

KJ法を援用し分類より、ポジティブな応答的行動としては、RC1で、「理由を聞く」、「もう一度『入れて』と言う」、「入れてくれるまで待つ」が、改変前のRC2で、「もう一度挨拶する」、「保育者に伝える」、「理由を聞く」、「気にしない」が、OC1で「作り直す」、「自分の思いを伝える」が、OC2で、「保育者に言う」、「許す」、「自分の思いを伝える」が出現率の高いカテゴリであった。同様にネガティブな応答的行動としては、RC1で、「手を出す・身体的攻撃」、「言いつけると脅す」、「泣く」が、RC2で、「手を出す」、「保育者に言いつける」が、OC1で「身体的攻撃・手を出す」、「怒る」が、OC2で、「身体的攻撃・手を出す」、「仕返しをする」が多かった。この分類された結果を以下の3段階で、著者を含めた心理学を専攻する大学院生2名と教員1名で選定を行った。

まず第1段階として、①ネガティブ行動、ポジティブ行動の両方に含まれる応答的行動は除外すること、②感情的反応ではなく、行動的反応であること、という2基準に基づいて除外を行った。この選定の結果、「保育者に言う」、「許す」という回答は除外された。続いて第2段階として、関係性攻撃と社会的情報処理ステップ5の関連を検討したCrick & Grotpeter(1995)において用いられていた応答的行動の2形態である関係性攻撃、顕在的攻撃との統一を行った。その結果、顕在的攻撃と考えられる「身体的攻撃・手を出す」という応答的行動は回答として得られていたが、関係性攻撃と考えられる回答は、改変前のRC2で得られた「関係性攻撃」というカテゴリおよび両関係性葛藤状況における「仕返しをする」というカテゴリにとどまった。そこで、本研究においてはそれらの得られた回

答と、Crick & Grotpeter(1995)の定義を参考に応答的行動を選定した。第3段階として、関係性、身体的・物理的葛藤状況内での合算および状況間での比較検討を可能とするために、提示される応答的行動を状況間で一貫させることとした。そこでエピソード間で回答の共通しているカテゴリに基づき、応答的行動を抽出した。その結果、有能行動としては「理由を聞く」、「思いを伝える」、顕在的攻撃としては「手をだす・身体的攻撃」が抽出された。

以上の検討を通して本調査からは、各葛藤状況エピソードにおける応答的行動として表3に示した12 応答的行動を選定した。今後の調査において社会的情報処理の各変数を測定する際には、本調査を通して幼児への提示の妥当性がある程度確認された4 葛藤状況エピソード(2 関係性葛藤状況エピソード、2 身体的・物理的葛藤状況エピソード)、および各葛藤状況エピソードでの12の応答的行動を用いることとした。

表3 結果から選定された応答的行動

		葛藤状況エピソード			
		RC1	RC2	OC1	OC2
応答的行動	有能主張行動 (思いを伝える／理由を聞く)				
		どうして後でなの	どうして何も言ってくれないの	なんで壊すの。一生懸命作ってたんだよ。	ぶつかったから靴が汚れちゃったよ。
	関係性攻撃行動				
		もう遊んであげない	もう友だちじゃないからね	もう遊んであげない	もう遊んであげない
	顕在的攻撃行動				
	押したり、たたいたり、けったりする				

今後の計画

今後は、研究2として、研究1で選定した状況エピソード・応答的行動を用いて、幼児の社会的情報処理を面接調査で、養育行動を母親に対する質問紙調査で、幼児の攻撃行動を保育者に対する質問紙で測定し、養育行動・社会的情報処理・攻撃行動という媒介モデルを検討することとする。

引用文献

- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology*, 7, 313-322.
- Crick, N. R. (1996). The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Mosher, M. (1997). Relational and Overt Aggression in Preschool.

- Development Psychology, 33, 579-588.
- Crick, N. R. & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N. R. & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722
- Crick, N. R., Grotpeter, J. K., & Bigbee, M. A. (2002). Relationally and physically aggressive children's intent attributions and feelings of distress for relational and instrumental peer provocations. *Child Development*, 73, 1134-1142.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., & Werner, N. E. (2006). A Longitudinal Study of Relational Aggression, Physical Aggression, and Children's Social-Psychological Adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 34, 131-142.
- Crick, N. R. & Werner, N. E. (1998). Response decision processes in relational and overt aggression. *Child Development*, 69, 1630-1639.
- Dodge, K. A. & Coie, J. D. (1987). Social information processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 1146-1158.
- Dodge, K. A., Pettit, G. S., Bates, J. E., & Valente, E. (1995). Social information-processing patterns partially mediate the effect of early physical abuse on later conduct problems. *Journal of Abnormal Psychology*, 104, 632-643.
- Dodge, K. A., Pettit, G. S., McClaskey, C. L., & Brown, M. M. (1986). Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51, 1-85.
- 濱口佳和 (2002). 攻撃性と情報処理 山崎勝之・島井哲志(編) 攻撃性の行動科学—発達・教育編 — ナカニシヤ出版 pp.40-59.
- 濱口佳和 (2004). 挑発場面における児童の社会的コンピテンス 風間書房.
- 畠山美穂 (2003) 幼児の仲間受容と社会的情報処理能力の関係 幼年教育研究年報, 25, 35-40.
- 畠山美穂・磯部美良・越中康治・蔡 佳玲 (2002). 幼稚園女兒にみられる関係性攻撃の被害者の行動特徴に関する研究：幼稚園での観察を通して. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域, 51, 343-349.
- 畠山 美穂・山崎 晃 (2006). 幼児の関係性攻撃及び外顯的攻撃による被害と孤独感との関連. パーソナリティ研究, 14, 194-204.
- 磯部 美良 (2001). 子どもの関係性攻撃に関する研究の展望. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域, 50, 379-386.
- 磯部 美良 (2002). 幼児の関係性攻撃と社会的スキルに関する短期縦断的研究 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域, 51, 249-255.
- 磯部美良 (2006). 幼児期の関係性攻撃と親の養育スキルの関連. 日本教育心理学会第 48 回総会発表論文集 p.5.

磯部美良・佐藤正二 (2003). 幼児の関係性攻撃と社会的スキル. 教育心理学研究, 51, 13-21.

川喜田二郎 (1967). 発想法—創造性開発のために— 中公新書.

Nelson, D. A. & Crick, N. R. (2002). Parental psychological control: Implications for childhood physical and relational aggression. In B. K. Barber (Ed.) *Intrusive parenting: How psychological control affects children and adolescents*, 161-189, Washington, DC: American Psychological Association (APA).

Poulin, F. & Boivin, M. (2000). Reactive and proactive aggression: Evidence of a two-factor model. *Psychological Assessment*, 12, 115-122.

三鈷泰代・濱口佳和 (2008). 幼児期の子どもをもつ親の養育スキルに関する研究. 筑波大学大学院人間総合科学研究科平成19年度中間論文(未刊公).

Weiss, B., Dodge, K. A. Bates, J. E., & Pettit, G. S. (1992). Some consequences of early harsh discipline: Child aggression and a maladaptive social information processing style. *Child Development*, 63, 1321-1335.

謝 辞

本研究を実施するにあたりご指導・ご助言を賜りました, 筑波大学人間総合科学研究科濱口佳和教授に心より感謝いたします。また, 調査の実施にご協力いただきました幼稚園・保育所の先生方に心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。